

第5章 一般学生との比較における体育系学生の セクシュアル・ハラスメント経験の特殊性

本章では、体育系学生を一般学生と比較しながら、彼女らが認識し経験するセクシュアル・ハラスメントの特殊性について探ってみたい。本調査では分析対象を体育系学生と一般学生の比較グループに分け、両者に対してスポーツ場面（スポーツ内）とスポーツ以外の場面（スポーツ外）におけるセクシュアル・ハラスメント項目を質問した。したがって、比較グループとセクシュアル・ハラスメント場面の組み合わせとしては次の4つがある。

- ①体育系学生のスポーツ場面におけるセクシュアル・ハラスメント
- ②体育系学生のスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント
- ③一般学生のスポーツ場面におけるセクシュアル・ハラスメント
- ④一般学生のスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント

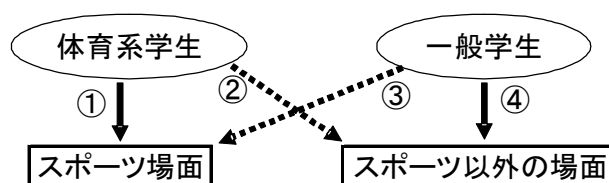


図5-1. 比較グループとセクシュアル・ハラスメント状況の組み合わせ

先行研究においてみてきたように、Fasting et al. (2003)は既にノルウェー女性のエリート競技者と非競技者を対象にして、エリート競技者がスポーツの場面で、非競技者が学校や職場などスポーツ以外の場面で経験するセクシュアル・ハラスメントについて比較している。また、体育系学生にとってのスポーツ場面（①）と一般学生にとってのスポーツ以外の場面（④）はそれぞれ最も日常生活領域であると思われる。したがって、本調査の目的を達成するための中心的な作業は、上記4つの組み合わせのうち①と④の比較だと言えるだろう。そこでまず、本章においては、体育系学生のスポーツ場面（①）と一般学生のスポーツ以外の場面（④）におけるセクシュアル・ハラスメントについて比較検討していくことにする。ただし、この組み合わせの比較から得られた結果には、その結果が体育系学生か一般学生かという対象による違いに影響を受けたのか、それともスポーツの場かスポーツ以外の場かという状況場面の違いに影響を受けたのかという課題が残される。こうした課題について少しでも検討するために、次章以降では図5-1における①と④以外の組み合わせについても分析する。

第1節 体育系学生のスポーツ場面と一般学生のスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識の比較

セクシュアル・ハラスメント認識として、セクシュアル・ハラスメントになりうる19の項目について「セクシュアル・ハラスメントと思うか」という質問をし、「そう思う」と「そう思わない」を両極とする4段階尺度、および「わからない」という項目を加えた計5段階で回答してもらった。本章

では4段階尺度を「思う」と「思わない」の2段階に変換した。

<全体的傾向>

体育系学生のスポーツ場面と一般学生のスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント認識を図5-2に示した。ある項目を「セクシュアル・ハラスメントだと思う」人の割合が多いのは次の5項目であった：

- ① 1)性的な関係をしつこく迫る
- ② 5)性的なうわさを流す
- ③ 8)性的な写真や雑誌などを見せる
- ④ 11)性的な電話やメールを送る
- ⑤ 9)からだをじろじろ眺め回す

「1)性的な関係を迫る」「5)性的なうわさを流す」「8)性的な写真や雑誌などを見せる」「11)性的な電話やメールを送る」など性的な内容の行為や言動、ならびに「9)からだをじろじろ眺め回す」という視覚的内容の項目であり、いずれの比較グループにおいても7割以上の人々が「セクシュアル・ハラスメントだと思う」と回答していた。

他方、「7)『おばちゃん』『ねえちゃん』など人格を認めない呼び方をする」「14)あいさつや励ましのためにからだにさわる」「16)お茶くみ、掃除、私用をさせる」といった項目はセクシュアル・ハラスメントと「思う」人より「思わない」人のほうが多く、「思わない」人の割合も概して5割を超えていた。

ある項目がセクシュアル・ハラスメントに該当するか否か「わからない」と回答する人の割合は、少ない項目で約1%、多い項目で約9%であった。「7)『おばちゃん』『ねえちゃん』など人格を認めない呼び方をする」「15)特定の人物だけに個人指導をする」「16)お茶くみ、掃除、私用をさせる」「17)女性の業績・実績を低く見る」「18)お酌やデュエットをさせる」「19)旅行や合宿先で自室に呼ぶ」といった項目では、比較グループには関わらず、5%以上の人々がセクシュアル・ハラスメントであるか「わからない」と回答していた。

<比較グループ間の差違>

次に、体育系学生によるスポーツの場におけるセクシュアル・ハラスメント認識と一般学生によるスポーツ以外の場におけるそれを比較し、その差違に着目する。

ある項目をセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人の割合を両グループ間で比較すると、その割合は19項目中17項目で一般学生よりも体育系学生のほうが低かった。ある項目をセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人の割合に両グループ間で10%以上の差がみられた項目は「4)性的経験や性生活について質問する」「9)からだをじろじろ眺め回す」「12)仕事や活動中に腕や肩などにさわる」「13)仕事や活動中に背中や肩をマッサージする」「15)特定の人物だけに個人指導をする」「17)女性の業績・実績を低く見る」「19)旅行や合宿先で自室に呼ぶ」の7項目であり、その項目がセクシュアル・ハラスメントだと思う人の割合は、いずれの項目においても一般学生より体育系学生で低かった。これら7項目の中でも特に「12)仕事や活動中に腕や肩などにさわる」「13)仕事や活動中に背中や肩をマ

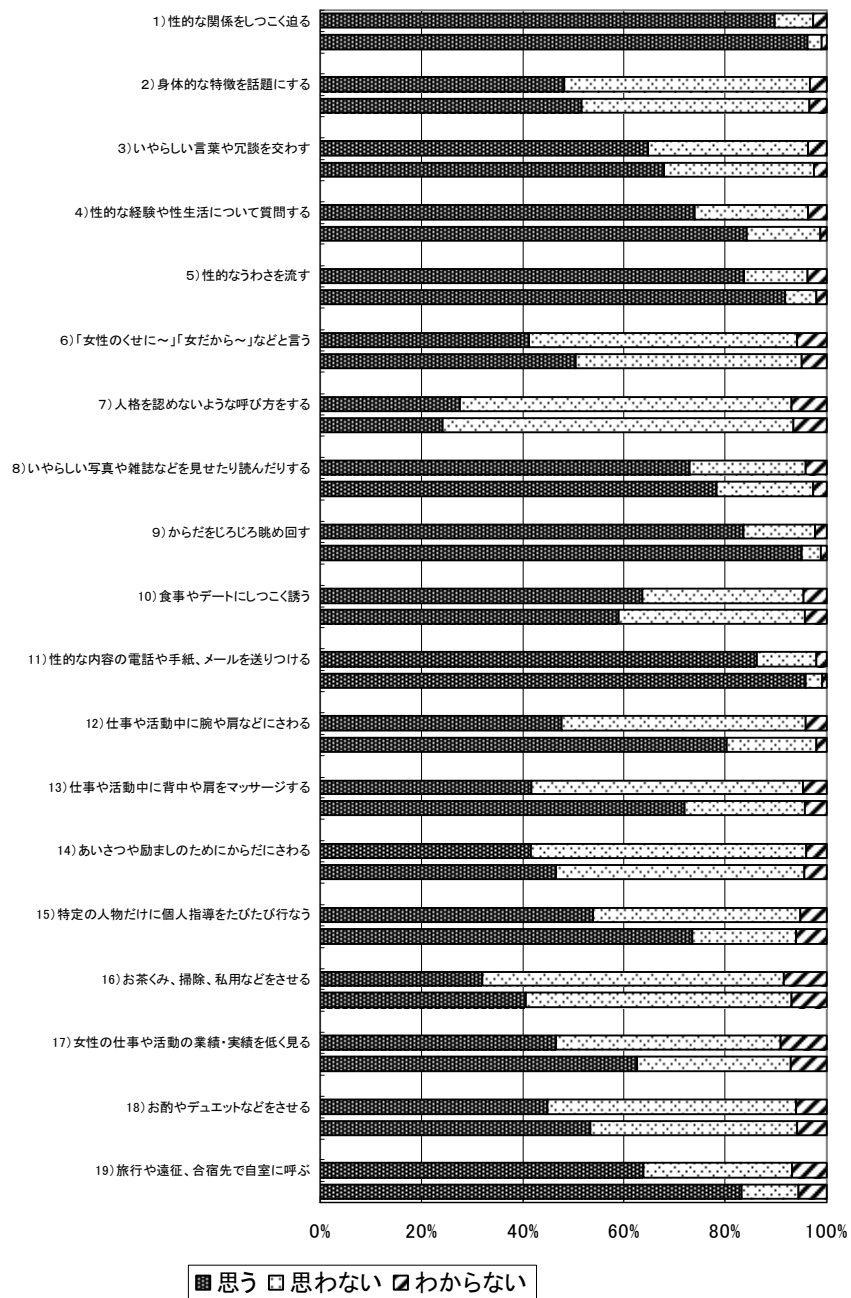


図5-2. セクシュアル・ハラスメント認識の比較
 (上段: 体育系学生「スポーツ場面」 下段: 一般学生「スポーツ以外の場面」)

「マッサージする」の2項目は両グループ間の差が30%前後もあり、両グループにおけるセクシュアル・ハラスメント認識が大きく異なる項目である。これらの項目に次いで「14)特定の人物だけに個人指導をする」「19)旅行や合宿先で自室に呼ぶ」の項目では両グループの差は20%前後であり、いずれもセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人の割合は体育系学生において少なかった。

ここで、両グループの差違が顕著であった「12)仕事や活動中に腕や肩などにさわる」「13)仕事や活

動中に背中や肩をマッサージする」の2項目について詳しく検討しておこう。これらの項目をセクシュアル・ハラスメントと「思う」人の割合は両グループで30%前後も異なることについては既にふれた。具体的には、体育系学生でスポーツの場で行われるこれらの項目をセクシュアル・ハラスメントと「思う」と回答するのは「12)仕事や活動中に腕や肩などにさわる」で47.7%、「13)仕事や活動中に背中や肩をマッサージする」では41.7%にとどまる。同時にこれらの項目をセクシュアル・ハラスメントだと「思わない」人の割合はそれぞれ48.2%と53.6%であり、つまりこの2項目に関してはセクシュアル・ハラスメントだと「思う」人よりも「思わない」人のほうが多いのである。一般学生でスポーツ以外の場においてこれらの項目をセクシュアル・ハラスメントと認識している人の割合は70%を越えている。スポーツの場における他人の身体への接触あるいはマッサージは、体育系学生によってセクシュアル・ハラスメントと認識される割合が極端に少ないという特徴的な項目であることを確認しておきたい。

第2節 体育系学生のスポーツ場面と一般学生のスポーツ以外の場面におけるセクシュアル・ハラスメント見聞の比較

次に、セクシュアル・ハラスメント項目として挙げられた19の言動を見たことがあるかどうかについて質問し、この質問に「見たことがある」と回答した人の割合を図5-3に示した。

まず一般学生がスポーツ以外の場面で見たことがあると回答した人の割合が多かった項目としては「2)身体的な特徴を話題にする」(48.9%)、「3)性的な言葉や冗談を交わす」(41.6%)、「7)人格を認めないような呼び方をする」(41.6%)があり、いずれも会話や呼び方など発言に関する項目である。他方、体育系学生がスポーツの場において見た項目としては「12)活動中に腕や肩などにさわる」(26.0%)「13)活動中に背中や肩をマッサージする」(25.3%)「2)身体的特徴を話題にする」(24.6%)などが上位にあり、これらはいずれも身体接触に関わる項目である。

体育系学生と一般学生の差違についてみると、19項目中16項目において、各項目の言動を「見た」と回答した人の割合は、体育系学生より一般学生において高かった。「13)活動中に背中や肩をマッサージする」「15)特定の人物だけに個人指導を行う」「19)遠征や合宿先で自室に呼ぶ」の3項目については、一般学生がスポーツ以外の場面で見るよりも体育系学生がスポーツ場面で見る割合のほうが高かった。

ある項目を「見た」と回答した人の割合が体育系学生と一般学生で大きく異なった項目は、「2)身体的な特徴を話題にする」「3)性的な言葉や冗談を交わす」「6)『女のくせに』『女だから』などと言う」「7)人格を認めないような呼び方をする」であった。その差は20~30%ほどもあり、いずれも体育系学生よりも一般学生において、その項目を「見た」人の割合は高かった。

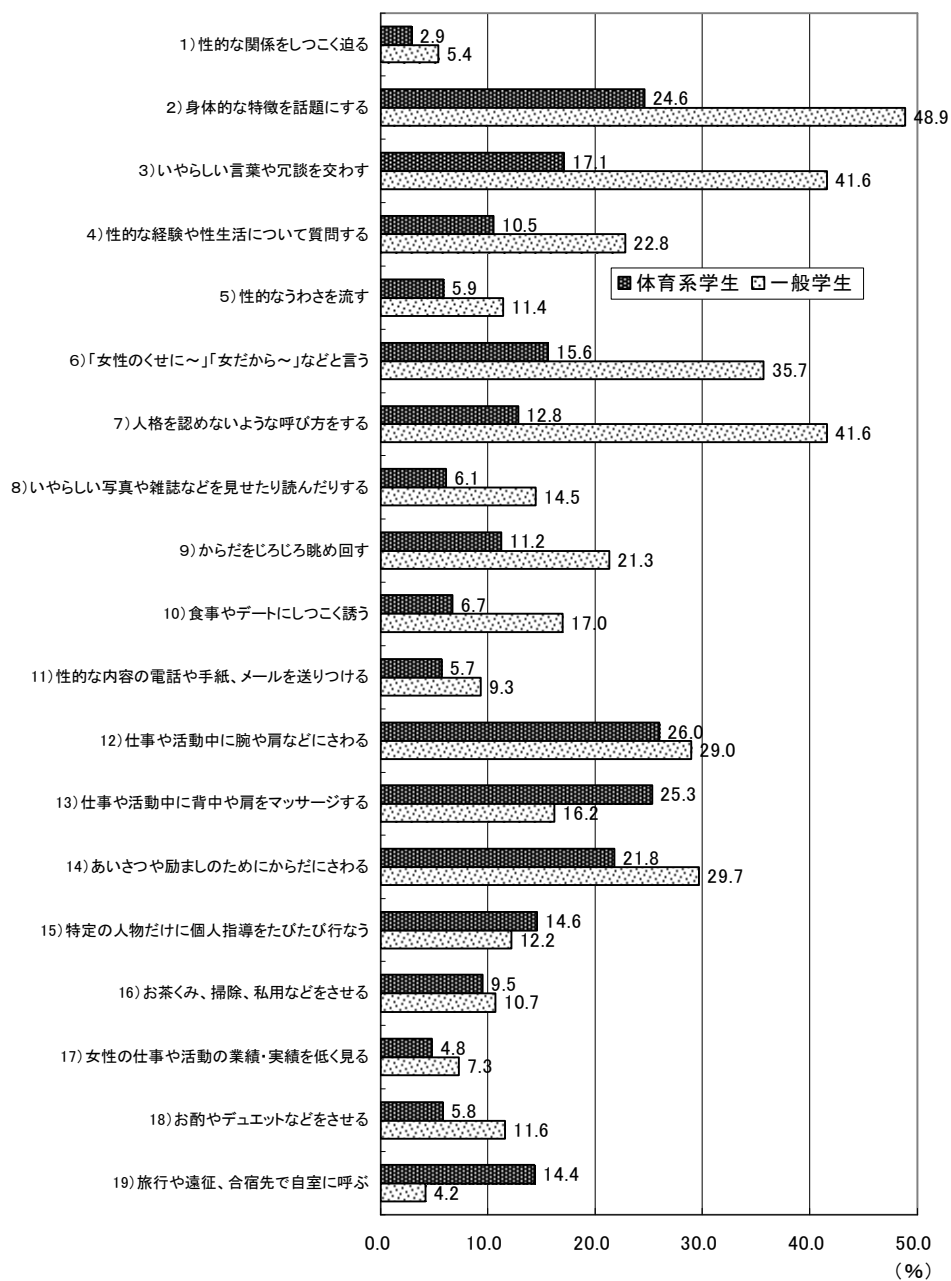


図5-3. セクシュアル・ハラスメントを見たことのある人の割合の比較
(上段: 体育系学生「スポーツ場面」 下段: 一般学生「スポーツ以外の場面」)

第3節 体育系学生のスポーツ場面と一般学生のスポーツ以外の場面で受けたセクシュアル・ハラスメント的行為の比較

さて、我々がセクシュアル・ハラスメントの項目として用意してきた 19 項目を、実際に自分が受けたことがある女子学生はどれくらいいるのであろうか。図 5-4 には 19 の各項目を「受けた」と回

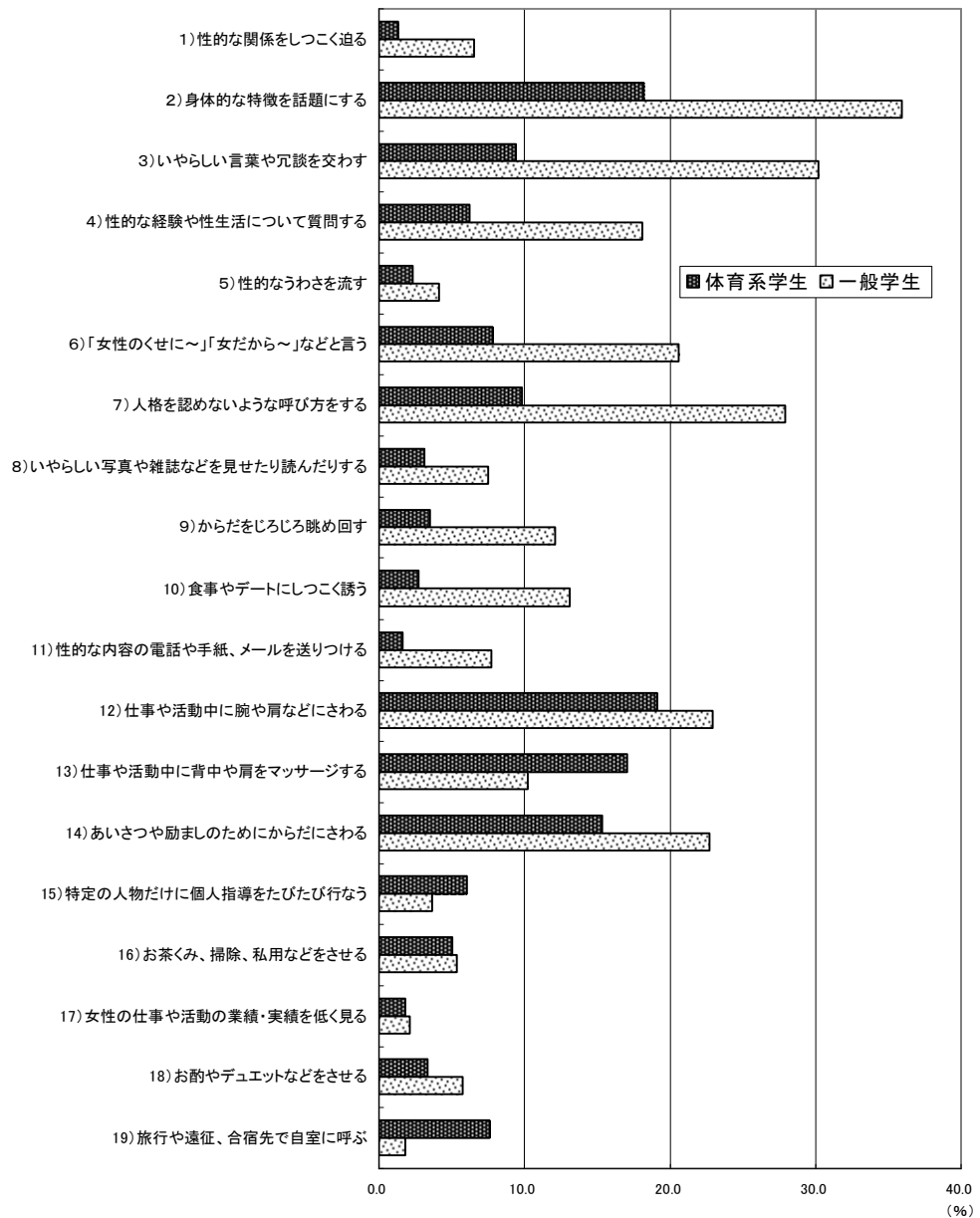


図5-4. 受けたことがあるセクシュアル・ハラスメント項目の比較
 (上段: 体育系学生「スポーツ場面」 下段: 一般学生「スポーツ以外の場面」)

答した人の割合を示した。

まず一般学生において「受けたことがある」人の割合が多かった言動は次の発言に関する3項目である:

- ① 2) 身体的な特徴を話題にする (35.9%)
- ② 3) 性的な言葉や冗談を交わす (30.2%)

③ 7)人格を認めないような呼び方をする (27.9%)

これら3項目は、一般学生が「見た」人の割合が多かった上位項目と一致している。他方、体育系学生が受けた上位項目は次の3項目である：

① 12)活動中に腕や肩などにさわる (19.1%)

② 2)身体的特徴を話題にする (18.2%)

③ 13)活動中に背中や肩をマッサージする (17.0%)

これらの項目もやはり体育系学生が「見た」人の割合が多かった項目と一致する。「見た」項目と「受けた」項目がほぼ一致していることから、スポーツ以外の場面では身体的特徴が話題になったり、性的な冗談や「ねえちゃん」と呼ぶなどの発言が、スポーツ場面ではあいさつや励まし、あるいはマッサージというかたちで女子学生の身体に触れるという行為が、それぞれ日常的に行われているのだと思われる。

体育系学生と一般学生の差違についてみると、やはり19の項目を「見た」場合の結果と同じように、19項目中16項目で体育系学生よりも一般学生のほうがそれらの項目を「受けた」人の割合が多かった。ちなみに、一般学生よりも体育系学生で多かった3項目は「13)活動中に背中や肩をマッサージする」「15)特定の人物だけに個人指導を行う」「19)遠征や合宿先で自室に呼ぶ」である。

ある項目を「受けた」人の割合が体育系学生と一般学生で大きく異なる項目は「2)身体的な特徴を話題にする」「3)性的な言葉や冗談を交わす」「6)『女のくせに』『女だから』などと言う」「7)人格を認めないような呼び方をする」であり、これもやはり「見た」場合の結果と一致している。これら4項目を「受けた」体育系学生と一般学生の割合の差は10~20%であり、いずれも一般学生においてその項目を「受けた」人の割合が多かった。

以上のように、19項目を「受けた」人の割合は、それらの言動を「見た」人の割合(本章第2節)と同様の傾向を示した。既に述べたが、ある項目を「見た」人の割合と「受けた」人の割合が体育系学生と一般学生でほぼ同じ傾向を示していることから、場合によってはセクシュアル・ハラスメントに該当する言動が、スポーツの場やスポーツ以外の場において日常的に行われていることをうかがい取ることができる。

第4節 セクシュアル・ハラスメントの経験と認識の関係

前節では女子学生が受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント項目についてまとめた。しかし、第1節でみたように本調査で取り上げた19項目すべてが女子学生によってセクシュアル・ハラスメントとして認識されているわけではない。つまり、同じ言動を受けていながら、受け手側の認識によってそれがセクシュアル・ハラスメントになる場合とそうではない場合が生じるのである。

そこで、前節における「受けたことのあるセクシュアル・ハラスメント項目」とセクシュアル・ハラスメント認識をかけあわせ、ある行為を受けたことがあり、かつその行為をセクシュアル・ハラスメントにあたりと認識した場合をセクシュアル・ハラスメント経験と捉えることにした。図5-5は、このようなセクシュアル・ハラスメント経験の割合を比較グループ別に示したものである。

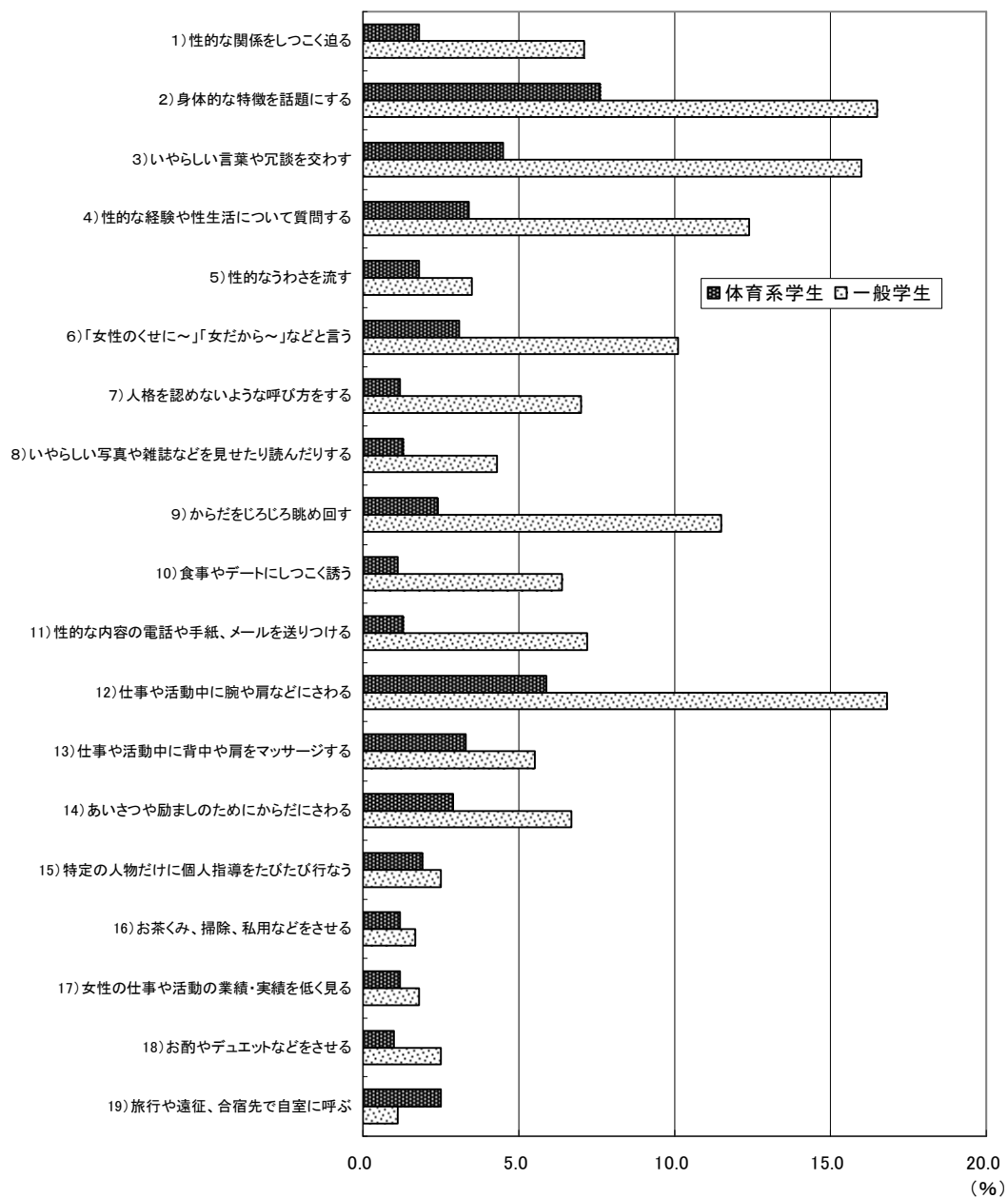


図5-5. セクシュアル・ハラスメント経験の比較
 (上段: 体育系学生「スポーツ場面」 下段: 一般学生「スポーツ以外の場面」)

体育系学生において多かったセクシュアル・ハラスメント経験は次の順である：

- ① 2) 身体的な特徴を話題にする (7.6%)
- ② 12) 活動中に腕や肩にさわる (5.9%)
- ③ 3) 性的な言葉や冗談を交わす (4.5%)
- ④ 4) 性的な経験や性生活について質問する (3.4%)

⑤ 13)活動中に背中や肩をマッサージする (3.3%)

受けたことのある言動 (図5-4) においてその割合が多かった「活動中に背中や肩をマッサージする」「あいさつや励ましのためにからだにさわる」などの項目は、その言動のセクシュアル・ハラスメントとしての認識において半数以上の人「思わない」と回答していた。その結果、これらの項目をセクシュアル・ハラスメントとして経験している人の割合は約3%であった。

他方、一般学生において経験した人の割合が多かったセクシュアル・ハラスメント項目は次の通りである：

- ① 12) 工作中や活動中に腕や肩などにさわる (16.8%)
- ② 2) 身体的な特徴を話題にする (16.5%)
- ③ 3) 性的な言葉や冗談を交わす (16.0%)
- ④ 4) 性的経験や性生活について質問する (12.4%)
- ⑤ 9) からだをじろじろ眺め回す (11.5%)

受けたことがある言動として上位にあった「7) 人格を認めないような呼び方をする」は、約7割の人がこれをセクシュアル・ハラスメントとして認識しなかったため (図5-2)、セクシュアル・ハラスメントとして経験した人の割合は相対的に少なかった。

次に、体育系学生と一般学生の差違について見てみると、19項目中18項目で、セクシュアル・ハラスメントとして何らかの言動を経験している人の割合は一般学生よりも体育系学生のほうが少なかった。唯一、体育系学生の経験が一般学生を上回っていたセクシュアル・ハラスメント項目は「19) 遠征や合宿先で自室に呼ぶ」(2.5%) であった。

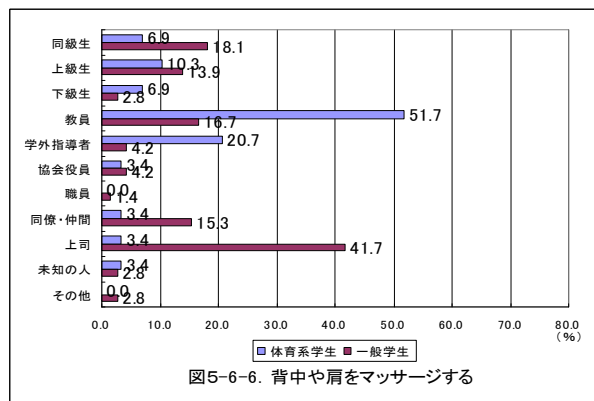
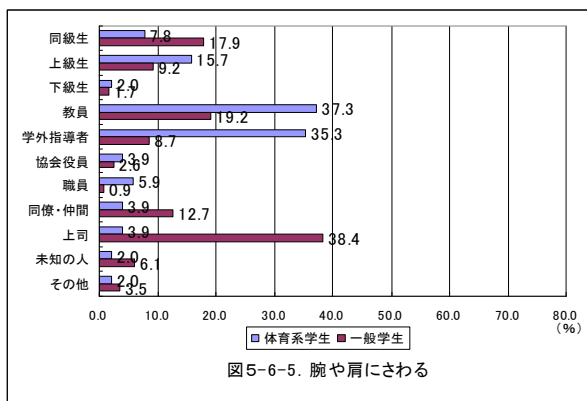
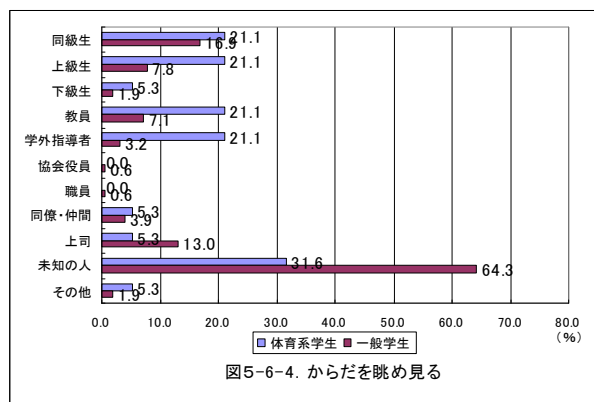
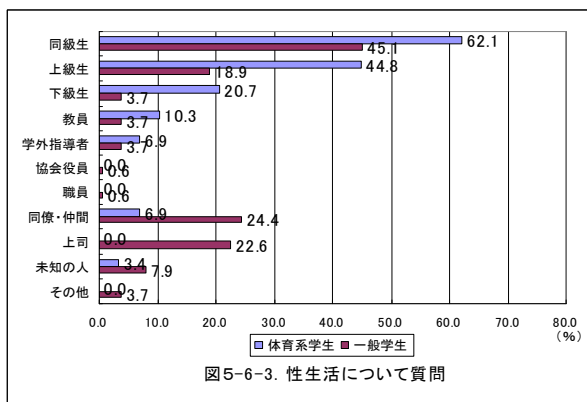
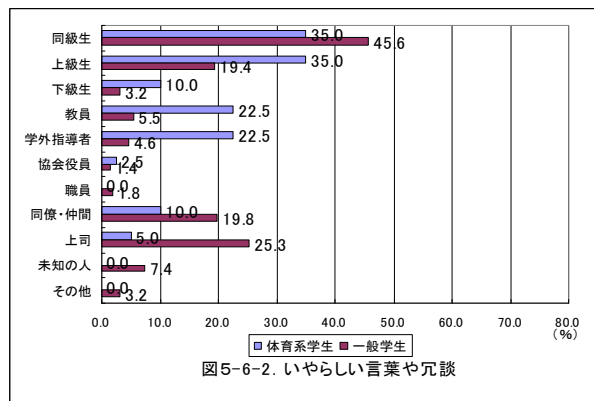
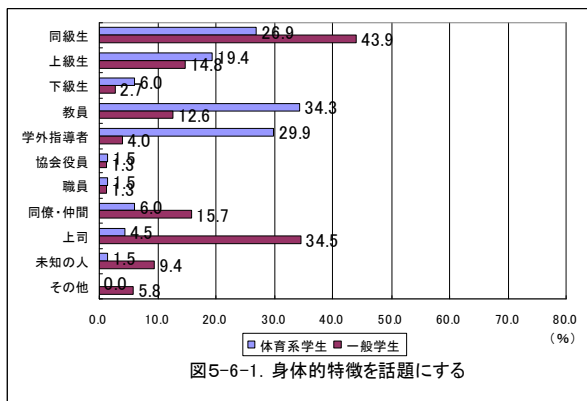
第5節 セクシュアル・ハラスメントの加害者とその対処策

前節で見たように、ある言動であっても、セクシュアル・ハラスメントと捉えられる場合とそうではない場合がある。本節では、ある言動を受けたことがあり、かつそうした言動をセクシュアル・ハラスメントだと思うケース、つまりセクシュアル・ハラスメント経験として上位にあがった6項目(2、3、4、9、12、13)を取り上げ、そのセクシュアル・ハラスメントの加害者およびセクシュアル・ハラスメントを受けた後の対処法について体育系学生と一般学生を比較しながら見ていく。加害者については「その他」を含め11の選択肢、対処法については6の選択肢をそれぞれ用意し、各自の経験における加害者とその時の対処法を多重回答によって選んでもらった。

<加害者>

図5-6にはセクシュアル・ハラスメント経験上位6項目の加害者を体育系学生と一般学生別で示した。セクシュアル・ハラスメントの加害者についての回答は多重回答である。また加害者によってケース数は大きく異なっており、ケース数がきわめて少ないとパーセンテージの値で比較することあまり意味はなくなってしまう。こうした限界があることを断ったうえで、図5-6におけるいくつかの傾向をあげてみたい。

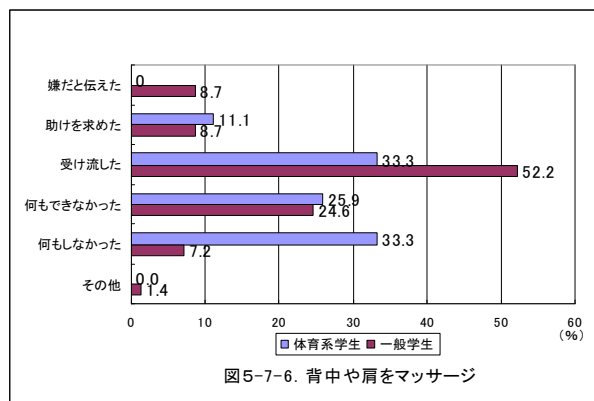
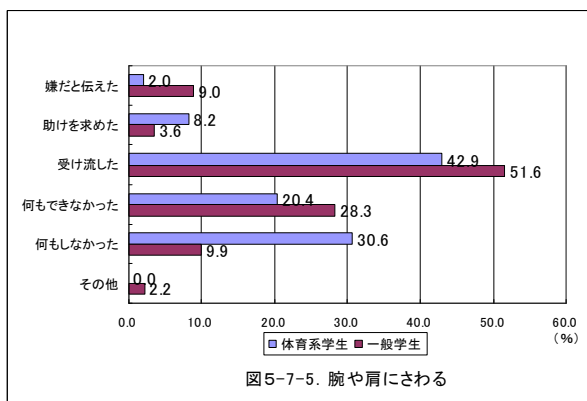
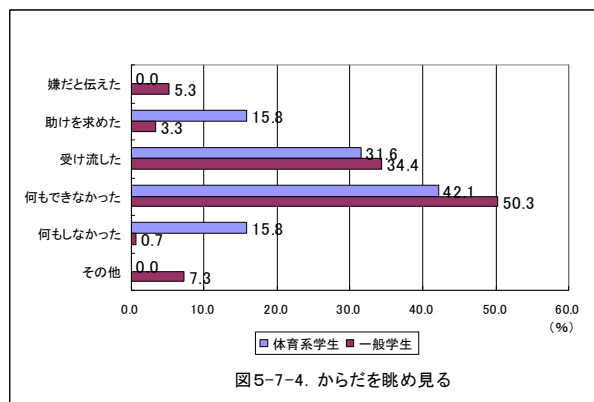
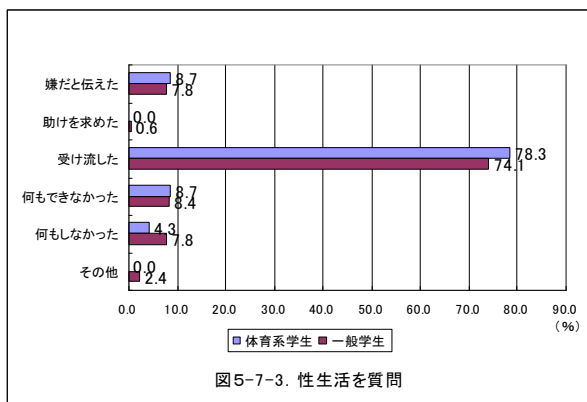
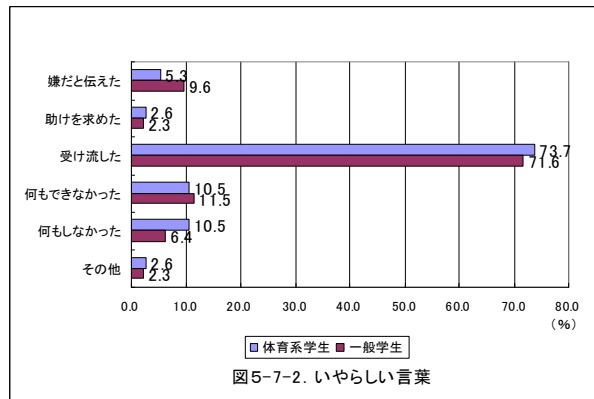
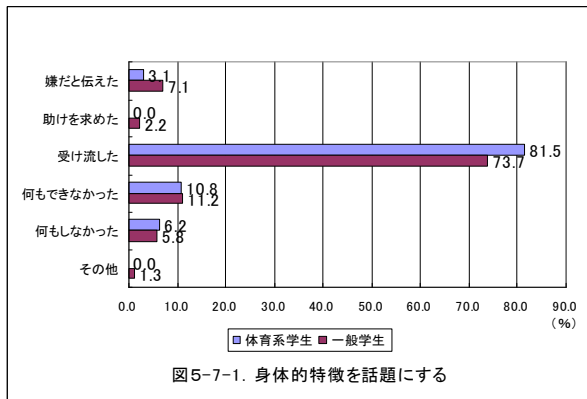
上述のように図5-6-1、図5-6-2、図5-6-3はいずれも発言や会話に関するセクシュアル・ハラス



メントであるが、こうした発言や会話は、体育系学生に対しては主として同級生や上級生、教員や学外指導者によって行われている。「身体的特徴を話題」や「いやらしい言葉や冗談」が同・上級生だけではなく教員や学外指導者によっても行われている様子がうかがわれるが、「性的経験や性生活を聞く」になると、その加害者の多くは同級生や上級生になる。これら発言や会話に関するセクシュアル・ハラスメントは、一般学生に対しては同級生や上司によって行われる傾向が強い。

図5-6-4の「からだを眺め見る」は体育系学生と一般学生ともに、見ず知らずの人によって行われる傾向が強くなり、特に一般学生において顕著である。

さて、図5-6-5と図5-6-6の2項目は身体接触に関する行為であるが、こうした行為は体育系学生



に対しては教員や学外指導者によって、一般学生に対しては上司によって行われている。特に、セクシュアル・ハラスメントとして受け取られている「活動中の背中や肩のマッサージ」が教員によって行われる傾向が強い点には注意が必要である。同級生や上級生と違い、教員や学外指導者あるいは上司は、女子学生にとっては権力者であり、身体接触に関わるセクシュアル・ハラスメントはそうした権力者によって行われる傾向が強いのである。

<対処法>

最後に、セクシュアル・ハラスメント上位6項目について、そうした状況が生じた場合の対処法を図5-7に示した。図5-7-1、図5-7-2、図5-7-3の発言・会話に関わる3項目のセクシュアル・ハラ

メントが生じた場合、女子学生は「適当に受け流す」ことによってその事態に対処する傾向が見られる。そしてその傾向は、わずかではあるが一般学生よりも体育系学生においてより強い。

図5-7-4の「からだを眺め見る」は視覚的なセクシュアル・ハラスメントであるせいもあり、その対処としては「何もできない」が多い。そして「適当に受け流す」がそれに続いている。

図5-7-5、図5-7-6の身体接触項目にも共通点が見られる。一般学生はこうした行為を「適当に受け流す」か、あるいは「何もできない」場合が多い。体育系学生では「適当に受け流す」「何もできない」に加えて「何もしない」という回答が多かった。「いやだと伝えた」「助けを求めた」といった拒否の意思表示は、いずれの場合も1割前後である。身体接触的なセクシュアル・ハラスメントを受けた場合、女子学生は特に意思表示をするわけでもなく、その場をうまくごまかすか、あるいはされるがままにそうした行為を受け入れざるを得ない様子が見られる。